SCHOOL INTERVIEW!

登校インタビュー

映画監督
後藤美波さん
ごとうみなみ
浜松西高校卒

後藤さんはニューヨーク在住のため
スカイプ（インターネットを使ったテレビ電話）で、
インタビュー取材しました!

声に出して伝えなきゃ変わるものも変わらない。

東京大学を卒業後、映画を学ぶために
米国のコロンビア大学大学院に進学した後藤さん。
在学中に自ら企画・脚本・監督を務めたショートフィルム
『ブレイカーズ』が国内外から注目を浴びた。
この秋、大学院を卒業し、映画監督に向けて
新しいスタートを切る予定の彼女に
大学生活やこれからの夢について話を聞いた。

後藤美波

1993年生まれ。浜松市出身。浜松西高校を卒業後、東京大学文学部に進学し、美術史学を専攻。卒業後は映画監督を志し、米国のコロンビア大学大学院フィルムスクールで映画制作について学ぶ。在学中に数々の短編映画を制作し、各国の映画祭で上映された。
昨年開催された国際ショートフィルム企画コンペでは最優秀企画者に選ばれ、その脚本を映画化した『ブレイカーズ』が今年完成。浜松の高校生活が舞台で撮影は市内でも行われた。
好きな映画は『バック・トゥ・ザ・フューチャー』、『ブレックファースト・クラブ』他。

何とかしたいと思っていても結局何もできなくてモヤモヤしていた高校時代。

西高生当時の写真。左から３番目が後藤さん。

――コロンビア大学での大学生活はいかがでしたか。

入学当初はホームシックでずっと泣いていました。私のクラスには、24カ国から集まった学生が65人程いて、日本人は私だけだったんです。同じグループの中に、金髪で身長が2メートルくらいあって、全身にタトゥーが入っているアメリカ人男性がいて、最初はすごく恐かった（笑）。アメリカでは意見せずに黙っていることが認められないので、質問に答えられないときは尋問されているような気分になりました。でもだんだんと慣れてきて、例のタトゥーの男性ともすごく仲良しになりました。

――大学では実際にどんなことを勉強しましたか。

私は監督・脚本・プロデュースという3つのコースの中からプロデュースコースを選んだんですが、実際はどの分野についても勉強しました。脚本を書いたり、座学で映画のビジネスを学んだり、クラスメートと映画を制作したりしました。

授業以外の学校生活でも「外から見た日本」や「日本人としての自分」を発見できました。「私は日本でこんなふうに育ってきたけれど、世界にはさまざまな人たちがいるんだなぁ」と感じられたのは、大きな財産になりました。